

夢想の雲

大和川 義之

庭に舞い降りた小雀の騒がしい声で眼を醒ました萩窪剛は、ベッドの上で深い溜息を吐いた。ベッドが備えられた四畳半の寢室に、老いを感じさせる臭気が漂ったが、当事者の剛には判らない。

よれよれのパジャマのままベッドから抜け、隣室の襖を開け、カーテンで遮られた暗く湿っぽいリビングに、キッチンから差す僅かな明かりを頼りに、厚手のカーテンを全開にした。待ち兼ねていた早朝の陽が無遠慮に進入した。剛は陽を吸収するように身体で受け止め、大きな伸びをした。住居からかなり離れた国道の騒音が、その日の活動を伝えた。

「おい、コーヒー」

何の気なしに云ったが、反応がなかった。剛の身を包むのは静寂のみで、哀しげな眼をリビングの隅に向ければ、陽光に輝く白木の中陰壇が妻の豊子の遺影を掲げていた。

剛は茶湯器で水を供え中陰壇の前に正座をし、臨濟宗の経を四十分ほど唱え終え、しばらく遺影を無音で眺めたあと、キッチンへ行き、コーヒーと菓子パン一つを盆に乗せ、リビングに四六時中置かれた、食卓兼用のホームコタツに置いた。サッシの硝子戸を開け放しそよ風を取り入れた。今の時期は風も心地良く、剛と逢うのを待ちかねた小雀たちが宙を舞い、轉りで騒ぎ立て、剛は手にした菓子パンを細かく千切り、小雀の腹を満たした。

剛は小雀と朝食を楽しみ、これまでなら豊子がテーブルの上に載せておいてくれた朝刊を取りに、郵便受けへ向かった。

玄関戸を開け、門脇の郵便受けから引き抜き、追憶するように戸外に眼をやった。近くの公園へダイエットの目的で散歩に向かった豊子が心臓発作を起こし、自宅から五百メートルほど先の疎水に倒れていたのを、懇意にしている酒屋の店員が発見し、救急車を呼んだが手遅れであった。豊子は七十五才の生涯を終えたのであった。

剛は余りにも急に豊子が逝ったのが信じられず、最愛の妻を亡くした哀しみに打ち萎れる時もなく、葬儀の準備に掛かった。独立している息子の健史や、娘の香華と力を合わせ、親戚一同、豊子の知人、萩窪家の知人に連絡をし、その間に葬儀社と打ち合わせ、通夜の接待の準備、遠方から駆け付けた親族の宿泊の手配で、逝った豊子を哀しむ余裕も生まれなかった。剛の変わりに、子供や親族が種々の手配をしてはくれたが、金銭が絡めば、一つ一つ細部に至るまで剛の了解を求め、接客をしながらも、求めの承諾に対応していた。喪主として式場から離れるわけにもいかず、弔問に訪れた人々に頭を垂れ、全身で京悼を表現しながら、

慰めの言葉を拝聴し、いかにも神妙に応えた。

取り急ぎ拵えた十万円を香華に預けたが、通夜ぶるまいに遣い切り、足りない分は香華が立て替えるといい、健史は剛に断りもなくタクシーをチャーターし、弔問客の送迎に割り当てたりした。剛のただ一人の肉親である兄の宗造は、遠く秋田県から家族づれで訪れ、健史が自宅へ招き入れた。

主だった人たちが拾骨を終え、葬儀社指定のレストランで精進落としをし、散会をしたのだが、お前独りでは寂しかろうと、宗造が勝手に決め、ちょうど春休みと重なり、息子夫婦と二人の孫とで、我が家を占領されたのである。

宗造たち家族は、秋田県で農業を営むだけあって早起きで、朝の五時には起床をし、女連中は仰々しく掃除をはじめ、剛を騒音で起こし、けばけばしい化粧を施した二人の娘は、嬉々として梅田、心齋橋、ミナミのアメリカ村の繁華街を闊歩し遊びまわっていた。

豊子もよりによって、春休み時期に逝かなくともいいのにと剛は怨んだが、農家を切り回している宗造は、昔気質な頑固者で、そのうえ我侬で自分勝手の話好きで、他人の話には聞き耳を持たず、剛を朝から眼の前に坐らせ一方的に精神論を語り、近くのスーパーから買ってきた五種類の漬物を肴にビールを飲み、剛は嫂が造った塩辛い味噌汁と、辛口の塩鮭で付き合い、今日は郷土料理を作るからと、連日惣菜代として一方円を取られ、釣銭の帰ってきただためしはない。

それでも良い、こうして三食の仕度までしてくれるのだから、半ばやけくそ気味で諦めていたが、ビールが一口でも入れば人が変わったようになる宗造は、赫い眼で剛を睨み、「お前は子供のときから弱虫で、近所の悪ガキから苛められ、ぴいびいと泣き喚き、儂がよく敵討ちをしてやったのを覚えているか、いまのお前はそのまま、豊子さんが亡くなった京しみは判るが、余りにも未練たらしく男らしくない、男なら、もつとしゃきつとならんといかん、分かっつるのか剛」から始まり、ああでもない、こうでもないと言々と、剛の箸の上げ下げに至るまで、好き勝手な説教が続き、もし口を挟もうなら、「お前は何も解っていない」と話は元に戻り、同じ言葉を再現するのである。

息子夫婦は朝食後、手持ち無沙汰を漂わせ、庭先で仲良く甘い物を食べ、揃って欠伸をしている。宗造の小言の種も尽きかけたところを見計らって、息子の嫁が、

「爺っちゃん、話がしつこいぞ、昼寝でもしたら、ちよつくら、お父と買い物に行ってくるで」で宗造の話の幕が下り、剛は開放されるのである。

四畳半一間と、六畳二間に十畳ほどのリビングがある平屋建ては、すっかりと宗造一家に占領され、リビングには宗造の万年床が敷かれ、心地良く酔いが回った宗造は、ごころと横になり、直ぐに鼾を掻いたが、剛がテレビでも点けようものなら、音響に反応した宗造が、

むくつと起き顔を真っ赤にして怒るのである。

宗造が眼を覚ました頃、香華が顔を見せた。

「宗造伯父さん、お忙しいのに申し訳ありません、父も心丈夫だと、喜んでいますわ」

「何の香華ちゃん、豊子さんを亡くし、うち萎れている剛を放っておけんでな」と云いつつ、冷蔵庫からビールを掴んできた。

「お父さん、良かったわね、宗造伯父さんが傍に居てくださって、私も一安心だわ」

冗談じゃない、朝から寝るまでビールを飲み、息子夫婦は飲兵衛の親父を剛に預け、昼前に買い物に行くといつて、剛から金を巻き上げ夕方まで帰らず、昨日も宗造の昼寝をしている間に、銀行から金を引き出したが、恐ろしい速度で預金が消えていくのが判らないのかと、香華の顔を睨みつけた。

箸の上げ下げから、洗面の仕様、履物の擦り具合に至るまで口喧しく、それも子供の頃からの癖の悪さだと理屈づけをし、何時間も説教され、あげくビールのお変わりまで取りに行かせられているのを、香華は知るまい。

亡くなった豊子を偲び、年老いた剛に哀愁が漂い、暮れなずむ夕陽に涙する余裕などあるものか、起床から就寝するまで宗造の守をし、独りになれるのは、トイレと入浴だけなのに、昨夕には「儂もはいる」と云って、放屁をしながら浴室へ入ってくる。もういい加減にしてくれ……と堪忍袋が破裂しそうだが、云ったら短気な宗造のことだ、子供の頃のように鉄拳制裁がききそうで、怖くて口が裂けてもいえない。

四月に入り、珍しく宗造一家が夕食に揃った。

「剛伯父さん、ぼつぼつ独りで生活しても大丈夫かな、娘の新学期も始まるし、田も鋤かんといかんし、秋田へ戻ろうと思うのだが」と息子から訴えられた。

剛にとっては大朗報である。狂喜したいが、喜びを押さえ、俺は大丈夫だよと応えようとしたが、

「だめだよあんた、このまま伯父さんを独りにさせられないよ、でも新学期が始まるし困ったもんだ……そうだ爺つちゃんに、もう少し残ってもらおうべか」と嫁が云った。

冗談じゃない、これ以上居残らされてはと、強く宗造が居座ることを拒否したが、それが通じるような一家ではない。

「儂も村役で忙しいが、と云って実の弟を放つばらかすような不人情は出来まい、しようがない、田植え時まで残ってやるか」宗造は、朝から数えて五本目のビールを開けた。

「おい剛、冷蔵庫が壊れているんじゃないか、ビールが生温いぞ」ときた。

なんなら爛にしてやるうかと、腹立たしさを覚え、最後通告のつもりで立ち上がり受話器を取り上げた。かけた相手は香華である。

「香華か、兄貴家族が明日、秋田へ帰ると云っているので、忙しいだろうが、新大阪まで付き合ってくれないか」宗造に聞こえるように、大声で言ってみてやった。

不服そうに剛を眺めていた宗造は、

「独りで暮らせると云う言葉を信じて秋田へ帰るが、もし耐え切れなかったなら、何時でも秋田へ来い、喜んで一緒に暮らそう、面倒見てやるからな」と指先で茄子の漬物を口に入れ、ビール腹を揺すりトイレへ向かった。

翌朝、香華が土産を手に現れると、酷い頭痛がするので、見送りを辞退した剛は、財布から香華に万札を渡し、いかにも名残惜しそうな表情で宗造家族を見送った。

姿が観えなくなると、嬉々として庭にブルーシートを敷き、宗造家族の寝具を陽干しにした。つづいて、喰い散らかしてある食器をキッチンで丹念に洗い、浴室や洗面所を磨いた。拭うことで宗造の口煩い臭気が霧散し、豊子の体臭が蘇る感覚に陥り、老骨に鞭を打ち、一気に掃除をし終え、コーヒーを手に縁側に座り込み、肩で大きく呼吸をすると、鼻につく香ばしいコーヒーに、ようやく生き返ったような気がした。

玄関戸が開き、香華が豊子に似た体重を感じさせる足音を響かせ戻ってきた。

「送ってきたわよ、宗伯父さんがお父さんよろしく云ってたわ」そのままキッチンへ行き、熱い茶を二つ運んできた。盆の上には、たこ焼きが乗っている。

「うわっ、綺麗に片付けて、本当に頭が痛かったの」

剛は苦笑いをし、爪楊枝で刺した、たこ焼きを口に入れた。

「旨っ、母さんは蛸が硬いと云って、口から出していた」

香華は剛を観察しながら、同じように口へ運んだ。

「お父さん、本当に一人でやっていけるのね？」

「大丈夫だよ、心配はいらない」

「でも、男所帯には蛆が湧くって言うわ」

「湧いてから、心配しろよ」

やっと宗造一家の騒音から解放されたのに、まとも口煩く声をかけられうんざりする。

「私も家があるし、そうも来られないけれど、三日に一度は顔を出せと思う」

「ああ」剛は香華に応えながら、食器棚から取り出した小皿にたこ焼きを乗せ白木の中陰壇に供えた。香華は剛の仕草に慈愛に満ちた眼で讚えた。

香華は剛のために、キッチンで夕食の惣菜を拵え、品目を伝えると「しつかり、よく噛んで食べるのよ」と、幼児に言い聞かせるように命じ、剛の生返事を背に帰宅をした。

剛は香華が去ったあと、息抜きをするようにぼんやりと庭を眺めていたが、聴力が衰えた耳に入るのは、車の走行音と、工事現場の騒音だけであった。身近な音が欲しくなり、テレ

びを点けたが、ワイドショウや子供向け番組に興味が湧かず、直ぐに消した。部屋内を見回すと、中陰壇に掲げてある豊子の遺影が、剛の仕草を嘲笑っていた。

三日後には中陰（四十九日）を終え、菩提寺にある萩窪家の墓に納骨する。その日には多くの参列者があり、段取りを健史が整え、伝えられた金を引き出しに銀行へ行っておこうと腰を上げ、出かける前の用を足さねばとトイレのドアをあけた。

香華が剛の掃除に不満があったのか、ジャスミンの香が鼻につき、ペーパーの端も三角折になって整頓され、浴室を覗けば、浴槽は光り、湯の放出を待っており、シャンプーや入浴剤も整理され、窓から差し込む夕陽が、浴室を茜色に染めていた。

兄家族がやっと思姿を消し自由を得たのに、香華の行為で掃除すらしつけられた気がし、憤りを覚え、ふてくされベッドに潜り込んだ。

ひんやりとした気配で眼が覚め、リビングにでた。戸外には闇が漂い、閉め忘れた縁側から冷気が部屋の隅々まで浸透し、キッチンには無人の寂しさが漂い、孤独感が剛の背に負い被さり、逃避するごとくテレビを点けた。数人のお笑い芸人が、仲間で中傷し合い面白くない騒々しさにチャンネルを変えると、古い映画を流していた。

剛は白木壇に正座をし、線香を灯し、鈴を打ち、般若心経を唱えだすと、なぜか涙が頬に流れ、観音経の中ほどで、肩を小刻みに揺るがし、読経を止め、豊子の名を呟き咽び、涙で滲む遺影に、心の中で読経をした。

深い溜息を吐き、冷蔵庫を開け缶チューハイを手にし、香華の作った惣菜を眺めたが、食欲が沸かないのかドアを閉じ、食卓に着きコップに往いだ。軽やかなバイクの音が聞こえ、掛時計が午前三時を指し、剛は誰の邪魔も入らないこの時刻に、自由を勝ち得た気分を味わう心地良さがあった。

一口飲むと、グレープフルーツの甘い香が口に広がり、かすかに微笑み、元気が出たのか、勢いを付け朝刊を取りに玄関へ歩んだ。少し寒気を感じ、ホームコタツの温度を上げチューハイを飲みながら、老眼鏡をかけ一面に眼を投じた。

「お爺さん」

空耳だろうか、豊子の声が聞こえた気がした。剛は再び新聞へ眼を投じると、またしても豊子の声が耳に届いた。剛は朝刊を置き部屋を見回したが、針一本落ちた反応もない。

「お爺さんたら、何も食べないで、お酒ばかり飲んだら、身体に悪いでしょう」

確かに豊子の声である。剛は老眼鏡を外し、声がするキッチンの方へ顔を向けた。

キッチンには、丸々と肥えた豊子が、四十代ごろの若々しさを誇り、艶然と佇んでいるではないか。

「豊子」

名を呼び、キッチンの方に身体を向け、正座をした。夢だろうか、夢でもいい、このまま覚めないでいてくれと、豊子を見て祈った。

豊子は冷蔵庫を開け、

「香華も馬鹿ね、お爺さんの好き嫌いが解っちゃいない、お爺さん待っていてね、急いでお酒の肴を拵えるからね」と豚肉とモヤシ、椎茸、ニンニクを調理台に用意し、豊子が使い慣れた中華鍋で、ニンニクを炒めだした。なんともいえぬニンニクの香ばしい匂いが剛の鼻をつき、剛は腹の虫を鳴らした。

さすがに豊子が拵えた肴は絶品で、缶チウウハイも咽越しが際立ち、キッチンの豊子に眼をやると、豊子は満足そうに微笑み、剛は微酔も手伝い欲情し、思わず白木壇へ眼を移すと、遙か昔に逝った母親が遺影額の中で微笑んでいた。

豊子が亡くなったのは、俺の勘違いであったと、モヤシのなかで豚肉の歯応えが、豊子が見せる愛情なのだと信じ、甘えるように、蕪の浅漬けを頼んだ。

直ぐに豊子が運んできた。しゃきしゃきとした噛み応えと、甘い蕪がなんともいえず、剛は役にお立つかは判らないが、艶然と微笑む豊子へのお返しとばかりに立ち上がり「待っている」とベッドへ向かった。

ベッドで下着を脱ぎ捨て、豊子の悦ぶ姿を想像し待ったが、キッチンを片付けているのか、入浴しているのか、あまりにも遅い豊子を待つうちに、剛は深い眠りに陥った。

蘇生から眼醒めたような寝起きをした剛は、下着もつけない下半身に恥辱を覚え、床に散らばった下着とパジャマを穿き、豊子に憤慨しながらリビングに立ち白木壇に眼をやれば、豊子の遺影が微笑んでいた。

「豊子」茫然と呟いた。

昨夜の出来事は夢であったのか、そうではない。その証拠に、飲み干した缶チウウハイが、テーブルに転がっているではないか。剛は豊子とセックスをしたのではないかと、股間に手を入れたが、尿意を覚えそのままトイレへ急いだ。

剛はトイレからキッチンへ歩んだが、途中で唾きびすを返し、トイレに戻り泡立つ尿を流し終えた。再びキッチンへ戻り、菓子パンを探したが見当たらず、コーヒーだけを手にし、縁側のサッシを全開すると、外部の騒音が耳に飛び込み、眉を顰め小雀を捜し求めたが姿は無い。豊子が丹精込めて育てていた草花が水分を求め、花も蕾も他に伏せていた。剛は草花に冷ややかな眼を向け、コーヒーを飲み干した。

パジャマを脱ぎ、外出の用者をした剛は、豊子が愛用していた買い物袋を手に、スーパーへ買い物にと立ち上がったが、顔見知りの店員から悔みの言葉をかけられるのかと思うと、応答することに億劫を感じ、買い物袋を投げ出した。

食欲も湧かず、風呂を使うのも気が向かず、浴槽も香華が洗ったままであった。剛は孤独感とはこのようなことなのかと、居間で横になったり、出もしない涙を咬んだりしながら、時間を浪費した。

中陰明け当日、夜が明けきらないうちに起きた剛は、風呂にも入り、髭をあたるのが豊子への礼儀だと信じ、下着も取替え、早めに顔を出す香華に小言を喰らわぬようにし、白木壇を掃除し、座布団を揃えるなどの法要の準備をした。

香華が家族づれで顔を出した。

「あらお父さん、用意のいいこと」

孫が剛に纏わりつき、香華が剛から手渡された法要費用を分け、茶菓子を用意するうちに、健史家族や招待客、最後に僧侶が現れ、マイクロバスで菩提寺へ向かい、納骨のあと精進落しを寺の近くのレストランで無事に済まし、健史と香華の両家族で帰宅をした。

健史の発案で夜は寿司でも取ることになり、香華が、

「お父さん、疲れたでしょう、ビールでも飲む？」と声をかけ、冷蔵庫のドアを開けた。

「お父さんっ」甲高い香華の憤った声が聞こえた。

剛が目を向けると、香華が食わずに残してあった惣菜を、荒々しく流し台に捨て、剛を陰しい眼で睨み、その眼にうつすらと滲む涙が、老眼の剛にも判ったが、悔しければ母さんの手料理に勝ってみると、香華に肚の内でも云った。

どうしたのと、嫂が問うたが、香華は多人数なこともあり、首を振り飲み物の用意をし、その日は供え物を分配し帰った。剛は子供たちの姿が消えると、どっと疲れを覚え、パジャマに着替え、そのまま熟睡をした。

次の朝、気分よく起床した剛は、モーニングコーヒーを用意する間もなく、玄関戸が開けられ、香華が顔を出した。

「お父さん、どこか身体の具合が悪いんじゃないの」

仏壇に、茶と菓子を供え、鈴を鳴らし香華が心配そうに云った。剛は答えずに、コーヒーを作り終え、居間に戻った。香華は剛の顔を覗きこみ、目脂を見つけた。

「早く顔を洗ってきなさい」子供を諭すように命じた。

剛は飲み残しのコーヒーを未練たらしく眺め、命じられた洗面に立ち上がった。

小一時間ほど、生活面の注意をこと細かく、くどくどと香華から受け、反論はしなかったが、口では勝てないので、いかにも神妙に聞き、相槌をうち、菓子パンや即席麺などを残して「本当に、独りで大丈夫ね」と念押しをして帰った。

香華は度々訪ねてくれたが、日が立つと、彼女も忙しいのか三日に一度の割合となった。豊子が逝って三カ月が過ぎ、もう半月も過ぎれば、じめじめした梅雨空から開放されるの

だと物思いに耽るある昼前、こんな日は何をするにも憂鬱で、ベッドに潜り込み、浅い眠りと、ぼんやりとした目覚めを交互に楽しんでいた。

玄関戸が鳴り、香華がやってきたのが判った。生まれ育った自宅だけに、勝手知り剛の寝室の襖を開け、眉を曇らせた。

「お父さん、何時まで寝ているの？」と剛を無理に起こし、窓を全開し外の空気を取り入れ、古い臭気を追い出した。しぶしぶリビングの座卓に付き、香華にコーヒーを頼むと、剛の趣味嗜好をそらんじている香華は、菓子パンを添えて出した。

手早く浴槽に湯を入れ替え、剛の傍に座った。

「お父さん、臭い、直ぐに湯に入って、下着も替えなさい」

剛は頷き、立ち上がり浴室へ歩むと、香華が、

「お父さん、痩せたんじゃない」と呟くのを背で聞き、歯ブラシと歯磨チューブを手に浴槽へ身を入れると、身体から垢が浮き出て、湯の表面へ花びらのように浮いた。

浴室の棚には、剛の下着と部屋着がセットされ、当然のような面持ちで身を纏い、リビングに座り茶を飲む香華の前に腰を下ろせば、冷たい麦茶が出された。

「お父さん、缶チューハイの空き缶は沢山あるけれど、他に何も食べた形跡が無いじゃないの、どういうことなの、お父さん」

剛は、黙したまま、ちびつと麦茶を飲んだ。

「やはり、独りじゃ無理なんだ」香華は剛に眼を向けたまま呟き、携帯電話を取り出した。

「兄さん、香華、いま構わない、お父さんのことだけど」

香華は健史に、剛がひとりて生活をしていると、食事も取らず酒ばかり飲み、日常生活は昼と夜を逆転し、放つとけば昼過ぎまで寝ており、このままではと大袈裟に剛の現状を訴えた。健史が近々に剛を交えて相談しようとする約束をし、香華が電話を切り鞆に収めて剛を覗き込んだ。

「お父さん、一緒に買い物へ行こうか」と剛の気分転換にと誘ったが、剛は首を振った。

身体から石鹸の香を漂わせる剛を置いて香華は、精のつくものを食べさせようと、子供の帰宅時間が迫って居るのを気にしながら、剛のためにスーパーへ急いだ。香華はステーキを焼き、野菜サラダにポタージュスープを拵え、剛の傍に付き、強引に食べさせた。

剛は食べ終わると、香華が片付けながら剛を観察した。リビングの剛は眠気を催したのか、整髪もしない白髪頭を上下させ、無精髭を伝わって涎が一筋膝に落ち、尊敬していた父の姿に香華は、キツチンで涙した。

「じゃあ帰るからね」家庭のこともあるので香華が自宅へと戻った。

剛は上目遣いで掛け時計を確かめると、豊子に逢える深夜までは、まだ六時間もあつた。

剛は夕刊を読み、時間をやり過ぎしたが、つい缶チューハイに手を出し、テレビを点けたまま、梅雨の雨音を子守唄にした、潔い眠りに陥った。

眼醒めると、点けっぱなしのテレビが「只今の時刻は午前七時二十三分、いつてらっしゃい」と、妙に明るい声でモーニングショウを放映していた。剛は飛び起き仏壇の遺影を確かめると、豊子の遺影が微笑んでいた。前夜に逢えなかった無念さと失望を身体に滲ませ、供えてある茶を入れ替えた。

「母さん、冷たいじゃないか、起こしてくれよ」

鈴を打ち、臨済宗の朝の勤めの読経に何時もより時間をかけ唱えた。

次の日曜日に、健史と香華の両家庭が集まった。孫たちは、マンション暮らしで土の庭が珍しいのか、梅雨の恵みを受け息を吹き返した草花が、小さくふくよかな孫の手足によって乱雑に荒らされても、剛は微笑ましく観えた。それよりも、「お父さん、聴いているの？」と香華の甲高い声が煩い。剛のことを案じて、忙しいなかを集まってくれたことは感謝するが、剛の独り暮らしの内容を詮索し、口々にこと細かく注意をするのは、困惑以外何物でもなかった。

「お父さんのことを思えばこそ、あれこれと知恵を絞って食事の用者をしたって、箸一つ付けようとしていない、冷たくなったら、レンジを使えばいいのに、嫂さんも見たでしょう、二日前に拵えた惣菜も、冷蔵庫に入っただまま、私の料理が気に食わなかったら、はつきりと云ってくれりゃいいのよ」香華が涙声で云った。

「香華の気持ちはよく判る、俺も仕事で忙しいから、そうは顔を出せないが、四十九日の時よりずいぶんと痩せたじゃないか、香華に聞けば、酒ばかり喰らって、一日中寝てばかりいるそうじゃないか」健史が強くと云った。

「義兄さんの云う通りだ、すっかり痩せている。お父さん、香華も心配のし通しで、このままじゃ香華が倒れる、どうですか、しばらく我家へ来ませんか、子供に話をしたら歓迎すると云っているし、お義母さんを亡くした哀しみは解るんですが、大勢の家族で暮らせば少しは気も晴れることでしょうし、いかがですか」

剛は、香華の夫の顔をちらつと視て、軽く微笑を浮かべた。

「ありがたい、でも、この家を離れたくないんだ」

「離れたくないって我俣云わないで、私たちがお父さんのことを心配すればこそ、うちの人も一緒に住もうと云ってくれているのよ」

香華は顔を紅潮させ、憤りを交えて、勢いよく喋った。

「実の息子は、仕事が忙しいと理屈をつけ、私一人にお父さんの世話を押し付け、私ストレスが溜まっておかしくなりそう、お願いだから我家へきてっ」

「おい香華、俺が何時、親父を放っておくと云った」

「そうよ香華さん、口が過ぎるのじゃないっ」

「だったら嫂さんたちが、この家に引越せば、私は内輪もめを起こそうとして、お父さんの面倒を見ると云ったんじゃないわ」

剛の顔の前を、健史夫婦と香華夫婦の唾が飛び交い、剛が庭先に眼をやると、余りの剣幕に孫たちが、眼を丸くし驚き立ち竦んでいた。

剛はこの家から動けば、深夜に豊子と語らい、手料理が味わえないことの辛さが、どうしても我慢が出来ない。何があっても家から出ないと硬く決意をした。

子供たちは勝手に、剛を二週間交代で、互いの家庭で面倒を見る約束をした。最初は云い出した香華の住居で面倒を見ることにし、香華が剛の荷を造ろうと立ち上がった。

「俺は嫌だ、誰の世話にもならない、どだい俺の意思をないがしろにして、勝手に物事を決めないで貰いたい」剛は声を荒げた。

「行かないって我俵ばかり云って、私たちが目を離したら、お酒ばかり飲んで、ご飯も満足に食べないじゃないの」香華が荷造りをしながら怒鳴った。

「いらん心配をするなっ、俺は毎日喰っている」

「喰っているって嘘をつかないで、食べてないの一目で判るのよ、毎日お酒ばっかし飲んで、アル中になっても知らないから」

「俺は、毎晩旨い手料理を、腹一杯食べているんだ」

「お父さんは、インスタントラーメンも造れなくせして、できるのは、缶チューハイの蓋を開けることぐらいでしょう」

「俺は造れないが、造ってもらっている」

子供たちが、愕然として剛を直視した。

「造って貰っているって、まさか親父、女でも拵えたのか」

「いい加減にしる健史、俺は女なんて作らない、俺は母さん以外の女は知らん」

「じゃ、誰の手料理なんだ」健史が眉を顰め問うた。

「むろん母さんの手料理だ」

瞬時、部屋の空気が凍りつき、剛の言葉に啞然とし、虚脱感に包まれた。

剛は口に出して悔やんだ。口が避けても云ってはならない豊子との秘密を、豊子と引き離されるのを回避するためにはいえ、取り返しが付かなかった。毎深夜に豊子と繰返す悦楽の蜜月の秘密を暴露したことは、豊子への裏切りであった。

「やはり」と香華が呟いた。

「母さんを亡くしたショックは、親父にとって想像以上だったんだ」健史も呟いた。

「でも、早すぎるわ」

「そうでもないよ、親父には前々から認知症の兆候はあった。母さんが生きていた頃、物忘れが酷く、よく注意をされていただろう」

「でも、お父さんは昔から物覚えの悪い人で、よく母さんを困らせていたわ」

剛を自宅へつれて帰る目的は薄れ、剛の認知症を知った衝撃に、これまでの考えを一変させ、今後の対策を協議しだした。剛は、自らの発言で家族から、認知症の認定を下され、大いに反省をしたが、時すでに遅しであった。

その日は香華家族が泊まり、豊子との深夜の出逢いは断念をした。次の日からは、健史の嫁や、香華が頻繁に訪れ、剛は生活のリズムを一般人と同じに変えられ、近くの公園まで散歩に連れられ、おかげで豊子との深夜のデートは出来ずじまいとなった。

そのうち、香華が区役所の人間や、医師まで連れてきた。剛は、この状況から逃れたかったが、なす術なく、入浴をしながら豊子の名を呟き泣した。

健史が香華と共に現れ、強引に病院へ連れられた。診察室で医師から、電車や花や猫のカードを見せられ、今日は何年何月何日ですかと猫などで質問され、憤慨した剛が怒鳴ろうとすれば、気配を察したかのように、医師から開放され診察室を出た。病院を出ると、道路を隔てて立てられている、六階建のマンションと思われる建物へ入った。

自動ドアが開かれ中に入ると、あらかじめ連絡が付いていたのか、中年の女性職員がこそば痒い口調で剛を出迎え、ここは病院の付属施設の私設の老人ホームだと剛は認識した。

「おいっ健史、どういうことだ、俺は惚けてはいないぞっ」と声を荒げたが、剛を取り囲んだ職員は、剛の抗議を無視し、若い男性職員に抱きかかえるようにして、健史たちから引き離された。剛は眼で健史たちを追ったが、二人は職員と共に別屋へ姿を消した。

剛はエレベーターで三階へ運ばれ、ドアが開き、腰の高さほどある柵を職員が開けロビーに出た。剛は目の前に繰り広げられる光景に驚愕し、身体を硬直させ、職員が誘導しても、足が凍りついたように動かなかった。ロビーに二十人近くの老人が屯し、女性職員の手拍子に合わせ立って踊る老人たちや、車椅子に背を丸くし座り、口から涎を流し手だけが踊っている老女、壁に向かって朗々と唄う老人。剛は弾かれたようにエレベーターのボタンを押した。エレベーターのドアが開いたが、剛はロビー中ほどに引きずられ、剛の眼にエレベーターのドアの閉まるのが見えた。

「俺は帰る、こんなところへ居るつもりはない、放せっ」と強く訴えたが、お構いなしに空いた椅子へ坐らされた。剛は職員の胸を押したが、

「はい、はいお爺ちゃん、そんなに怒らないで、良い子になりましたよね」

「お爺ちゃん、一緒に踊りましょうね」横から笑顔を浮かべ割り込んだ女性職員が、剛の両

手首を持ち上げ調子に乗せた。剛が抵抗するが、加えられた力は強烈で剛の想像を絶した。剛が職員の眼を見ると、冷酷な光りが宿り、給料分だけ労働の業務を行使する態度があらさまで、老人を労わる気が失せているのが剛には感じられた。

一時間ほどして、健史と香華が姿を見せた。自宅へ戻っても、剛は一言も口を利かず、香華が入れた茶さえも口に付けず、健史がホームのことを口にするると、剛は仏壇の前に座り、大きな声で読経を始め、豊子の遺影に積もった鬱憤を訴えた。

健史が申請した介護サービスは、剛に余裕を与えず、取りあえずは週二回のデイサービスから開始された。剛は収監される囚人の面持ちで車へ乗り込み施設へ通った。出された食事は、剛の舌には合わない薄味で軟らかく咽を通らず、初日は一口喰ったが、それ以後は一口も手を出さなかった。施設で一番の手強い老人だと烙印を押され、通うたびに香華に連絡を取り、その日の苦情が伝えられた。

デイサービスから戻ると、香華から一時間ほど施設での悪行の反省を求められ、香華の眼の前で夕食を摂る。さすがに香華は豊子の子だけあって、料理は口にあっただが、少し喰ったが、まだまだ豊子の足元には及ばないと、大半を残し、香華に叱りを受け、入浴を命じられる。

深夜に味わう、豊子の手料理が懐かしく、喰いたい。どうすれば可能かを考える毎日を送った。無理して深夜まで起きればいいのだが、デイサービスと香華の来襲に耐えてまでの体力が無いのを自覚するだけに、剛の思考では思いも付かない。

朝刊にホームセンターのチラシが入っており、剛が何の気なしに視て、はっと気付いた。今日はデイサービスが無く、前日に香華が遅くなると云ったのを記憶しており、外着にやつし、ホームセンターへ急いだ。頑丈な鎖と錠を購入した剛は、家中の開閉の可能である総てのドア、窓に錠を設置し、誰も入れないようにした。

夕方近くなって、玄関から戸を揺する音がし、香華が剛を呼ぶ声がし、暫らくしてから縁側からも声が聞こえ、剛は息を殺し耐えていると、一時間ほどして香華が去った。

剛は、眠いのを耐え、テレビはイヤホンで耳にし、他人に気付かれぬように灯りもつせず、ただ深夜を待った。

暗闇のなかで、キッチンが霧の中に浮かぶ街灯のように、ぼんやりと明るくなった。

剛は手元に置いた懐中電灯を仏壇へ向けた。仏壇には剛の母の遺影があった。

剛は顔を崩しキッチンを見た。キッチンには、後輩の豊子が立っていた。

「豊子」剛は妻の名を呼んだ。豊子が振り向いたが、眼には涙が溢れていた。

「どうした豊子」剛が立ち上がろうとすると、豊子が止めた。

「どうして私を放っておいたの、酷いじゃないの、どれだけ待ったと思っているの」

「すまない、皆で寄ってたかって邪魔をして、どれだけ逢いたかったか、健史や香華に痴呆老人にされた」寂しそうに訴えた。

「ああ、全部見てたわ、あれだけ強引にされたら、正常な貴方も抵抗できないわね」

「そうだ、あんなに親不孝な子供に育てたつもりはない、お前の教育が悪かったんだ」

「えっ、私が悪いって、どうせそうでしょう、ああ、私が悪いんですっ」豊子が頬を膨らませ憤った姿は、剛が人生のなかで一番幸せと感じた頃の、四十代半ばの豊子であった。

「怒ったのか」

「ふん、勝手にしたら」キッチンの豊子は、剛の眼の中で足から溶けるように消えだした。

「待ってくれ豊子、お前は一つも悪くない、悪いのは俺だ、謝る、悪かった」

「本当に心から反省してるの、お父さんはいつも自分が正しいと思って、子供たちは一家を構えている自覚で物事を判断しているのよ、家庭を犠牲にしてまで、お父さんの世話を焼く余裕などないのよ、お父さんを憎くてしたんじゃないのよ」

豊子は身体を元へ戻し、冷蔵庫から食材を取り出し、剛のために缶チューハイとコップをテーブルに置いた。傍に来た豊子の体臭を嗅ぐと、剛は自分の年齢を忘れ豊子に欲望し、濃いブルーのスカートから覗く白い脹脛に縋りつきたくなった。

「豊子」

「なあに」

「久しぶりに……したくなった……」

剛は、顔を赤らめ、小さな声で誘った。

「いいわよ」

豊子は艶然と微笑み、剛の寝室の襖を開け、エプロンを外し、スリップ姿で剛に微笑み、ベッドへ潜り込んだ。剛は豊子が拵えた料理をそのままに、衣服を取り、全裸になり、カーテンの隙間からへ入った月明かりが、剛の痩せ細った肋骨を浮きぼりにした。

剛は、豊子との仲を裂かれぬように、より慎重になり、電気は電源を切り、ガスは元栓を閉め、水も使わず、ただベッドに身を横たえ深夜を待った。蒸し暑い家の中は、風呂にも入らず、身体に吹き出物を拵え、ただひたすらに豊子と深夜を過ごしたが、豊子は剛の不潔な身体に不平を洩らさず、剛の愛に応えた。

デイサービスの迎えにも応えず、健史や香華の呼びかけにも返答がないのを不審に思い、警察官の立会いのもとで、強引に門の鍵を壊し進入し、縁側に回った健史たちは、サッシを開けようとしたが施錠されており、置石代わりのブロックで硝子戸を叩き割り、カーテンを曳き千切った。

「お父さんっ」香華が悲鳴のように叫んだ。健史も叫んだ。

剛は枯れ枝のように痩せ細った全裸の身体を折り曲げ、仏壇の前で動かなかった。

香華は剛の体に取り縋り、声の限りを尽くして泣いた。健史は差し込む陽射しを顔に受け、剛と瓜二つの眼から、涙を流していた。

応仁の乱の矢玉で傷ついた勅使門が今に残し、深閑とした静寂を漂わせる京都の八坂通りに佇まいを魅せているのが臨濟宗大本山建仁寺である。勅使門から詣でると、東隅に樹齢五百年は越えている楠木が、葉叢を大文字山からの微風にそよがせている。樹上に人目を避けるようにして、白金に輝く絨毯のような雲が漂っていた。雲上からの眺望は、勅使門を潜り観れば、放生池に姿を移す三門（望閑楼）が爽然と建立され、門のかなたには、三門を慈しむ眼差しを湛えた法堂が聳え建ち、堂内には江戸時代に越前（福井県）弘祥寺から安置された釈迦如来坐像が信者に慈愛の微笑を向けている。釈迦如来坐像を守護する両脇の従像は、左脇が釈迦十大弟子の一人で、釈迦滅没の後、教団統率者の多聞第一、右には頭陀第一が控え、天井に描かれた双龍図が、貴顕きけんを物語る眼光と五本の指爪が法堂を見守っている。

楠木の上に漂う雲に、白菊の香を乗せた陽射しが差し込み、白銀をまばゆく輝かせた上に、二人の男女が居た。男は女の膝に頭を乗せ、何かを覗いている。

男は剛で、女は豊子だ。剛はくすつと笑った。俗世間の出来事が手に取るよう観え、健史と香華が、剛の葬儀に動き回っていた。剛は香華がどこに隠してあるのかと思うほどの涙を流し、剛を偲ぶのが可愛く、哀れに思った。

「お父さん、心配しないで、あれで子供たちも、お父さんを見送ることで、世間への責任を果たし、明日から自分たちの生活を営むのよ」

「そうか、そういうものか」

「そうよ、私たちとは違うんだから」

「どう違うんだ」

「二人は固い約束をしたでしょう。死ぬときは一緒に死のうと」

「うん、えっ、……だから俺を呼んだのか」

「うっふふ」豊子が意味ありげに笑った。

剛は幸せそうに微笑み返した。二人の身体は、二人が子育てで愛の充実感で埋まっていた頃の若さに戻っていた。

「おい母さん、あれは？」

剛が豊子の膝から体を起こし、法堂の方を指差した。

法堂の天井図に描かれている双龍の口から、高貴な紫の靄が立ち登り、二人の乗る雪に向かって伸びてきた。靄は白金の雲に到達し、二人の雲を同じ紫に彩を変えた。やがて、法堂

から、二人で毎朝唱えていた般若心経が聴こえ、眼を凝らすと、こちらへ経を唱えながら人の群れが迫ってきた。

迦葉尊者の頭陀第一が先頭となり、後に迦理迦、迦諾迦伐蹉を含めた十六羅漢が整然と列を組み進み、観音経に移行し、経半ばで剛と豊子を囲んだ。

「ようこそ、俗世界の修行から戻られた。常日ごろ臨済宗徒として俗世間に惑うことなく勤められたことの信心を、深く阿弥陀如来様が賞賜され、翁生院法光精道信士（剛法名）には連れ合い共々、永劫の地を与えん」

二人は頭陀第一の導きで、紫の雲を往けば、戻りを許さぬように、雪が霧散していった。広大な建仁守の敷地には、法堂の北に方丈の館があり、仏門を囲み、七間があった。

七間には、桃山時代に描かれた、重文の襖絵がある。七間の中の衣鉢の間は、海北友松筆の琴棋書画図が東南十幅の人物絵が保存されている。

厳明な造形美で描かれた樹木と古岸の自然美が、時の流れを穏やかに映し、歩み休む古代人の姿を礼節を重んじながらも、今にも襖から飛び出しそうに描写されている。

大きな古岩を前に松樹に囲まれた小体な藁葺きの東屋が描かれ、奥には竹林から柔風がそよぎ、通りを往く役人の供つれを、夫婦の住人が一服しながら語り合っている襖絵であった。

以前は翁二人が酒を酌み交わす図であったが、よく眼を凝らすと、萩窪剛と豊子夫妻の姿に換わっていた。